



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

欠くことのできない方をこの一年証ししていこう

新年明けましておめでとうございます。年賀状を小教区の皆さまにはお出ししていないので、この場を借りてご挨拶申し上げます。本年もよろしくお願い致します。

今年の干支は「寅」です。今年の縄跳びに続き、年末からは「トラ」ンポリンを始めています。毎日続けています。目標は今年一年間向き合い続けることです。向き合うと言え、今年度私たちは、いよいよ耐震補強の準備に取りかかります。初めから無理だと恐れず、工事完了の日を想像しながら、一つずつ目の前の課題に「トラ」イしましょう。

神の母聖マリアに選ばれている朗読箇所は、羊飼いたちが、自分たちの見た光景を人々に知らせる場面です。大切なもの、欠くことのできないものを見たので人々に知らせる。幼子の誕生が羊飼いを引き寄せ、彼らは見ただけで終わらず行動に出ました。

マリアが見たもの、それは「幼子を見いだした羊飼いが、出来事を人々に知らせる人になった」という様子です。羊飼いたちは、神の救いの働きが小さくか弱い姿に宿ったことを理解しました。羊飼いたちもか弱い立場の者たちでした。自分たちと同じ境遇に神が姿を取られたことを見たので、勇気づけられ、人々に知らせるのです。

母マリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19)とあります。マリアの行動が、私たちのこの一年全体に影響します。羊飼いのように、出来事を自分にとって大切なもの、欠くことのできないものと見る人が増えて欲しい。そして出来事を人々に知らせる人になってほしい。これが、出来事を見たマリアが思い巡らしていたことなのでしょう。

私たちも、今の時代に照らし合わせて思い巡らしましょう。私たちが、幼子イエス様を収める心の部屋を用意し、自分にとって大切な方、欠くことのできない方として受け入れるとき、羊飼いの働きが今の時代にも始まります。出会う人に、イエスは生活に必要な方、欠くことのできない方ですと、伝えに行くのです。

ミサの後、あなたはお友だちと会うかも知れない。大切な人と会う約束をしているかも知れない。会いたくない人とうっかり会うかも知れない。それらの人々は、大切な方として心の中に受け入れた幼子イエスを、告げ知らせる相手なのです。そう思ってこの一年出会う人を思い浮かべると、私たちには自然と語るべき言葉が与えられるのです。語るべき言葉は、ここに集まっている新成人にも必ず与えられます。

昨年末、中田神父は茨城に住む妹夫婦の小学生の息子を連れて、実家の鯛ノ浦に帰りました。甥っ子はまだ洗礼を受けていませんが、私にとって真っ先に、幼子イエスのことを知らせる相手となりました。この世を照らす光が甥っ子にも火を灯し、輝いて欲しい。強く願いました。

主の公現(マタイ 2:1-12)